

## Topic of the Month

最近メディアをにぎわしている話題のひとつが、某自動車メーカーによる欠陥車問題である。この経緯を大まかに振り返ってみると、発端は2002年1月に発生した事故であった。走行中のトラクターのタイヤが外れ、ベビーカーを押して歩道を歩いていた主婦の背中を直撃し主婦が死亡、一緒にいた二人の乳幼児も軽傷を負ったというものである。調査の結果タイヤ脱落事故が続いていたことが判明し、翌月から部品の無償交換を実施したが、この時点では「自動車の構造、装置または性能が、自動車の安全上、公害防止上の規定に適応しなくなる恐れがある状態または適応していない状態で、原因が設計または製作の過程にある場合（国土交通省のホームページより抜粋）」に回収し無料で修理するリコールの対象とはされなかった。この事故に対し、翌年3月に遺族が賠償提訴し、10月と2004年1月にはメーカー本社の捜査が行われた。さらに遺族が制裁的慰謝料1億円を増額申し立てする中で、この3月になって部品の欠陥を認める発表がなされた。しかしこれはこれにとどまらず、他の問題でも欠陥を認識しながらリコールせず、事故で死者が出ていたことが判明。さらにリコールすべき内容がグループ企業製品まで広がりを見せているのが6月初めの状況である。

今回の問題は、2000年に76万台をリコールしたそのメーカーが再び同様のことを繰り返したことで会社の体質を問われている側面がある。そのため「あの会社がまた…」という形で取り上げられがちだが、本当に「あの会社だけ」だろうか？

振り返ってみると、車の欠陥隠しが問題になったのはこの会社だけではない。また、業界は違うが2000年に発覚した某食品メーカーの事件も企業倫理の問題として大きな影響を与えた。これらを他山の石として、確かに最近では自主回収記事や広報を目にすることが増えた。しかし今回問われているのは

何も現在の問題だけではない。過去の問題で処理されずに残っているものもその対象となっている。2000年のリコールでは98年以後の問題に対応したが、今回は資料に残っている93年12月まで遡って調査した結果、さらにリコールの必要な項目が出てきたという。漏れの無い見直しと、適切な対応が求められている。

ものづくりは人の行動であり、人の行動であるからには間違いや失敗は必ず起きる。ミスを取るかしいものとして隠そうとしたのが以前の日本企業の行動だったが、今ではミスをミスとして認め、公表した上で素早い対応を取ることが求められている。私自身も含め、昔の体質の中で育った人間にとって行動パターンを変えることは困難ではあるが、変えなければ生きていけない時代になったことを認識しなければならない。

閑話休題。

日本機械学会は会員数最大の学会ということだが、その地位は危なくなってきた。日本機械学会の会員は4万人を割り込み、減少傾向が続いているが、自動車技術会は会員数を増大しつつあり、2月末に個人会員は68名差まで迫った。JSMEの魅力が低下している表れかもしれないが、両学会に籍を置くものとして考えてみると、その違いがある程度理解できる。

そのひとつに、昨年自動車技術会が始めた「全日本学生フォーミュラ大会」の存在がある。SAE (Society of Automotive Engineers) が1981年に始めた「Formula SAE」をベースとするこの大会では、「アマチュアサンデーレーサー市場向けオープンホイールフォーミュラを製作する」ことが求められているが、他のものづくり大会との最大の違いは、車両の企画立案から部品や資金調達、設計・製作・コスト・性能という、ものづくりにおける一連の活動すべてが審査対象になることである。学生たちが興味

を持つレーシングカーをネタに、学生会員になることで参加費を安くする特典をつけ、学生会員増大に成功している。私は「東京大学フォーミュラファクトリー」のアドバイザーを務めているが、参加した学生たちは皆「いい機会を作っていただいた」と自動車技術会に感謝している。学会員を増やした上に、感謝してもらえる。なんとも素晴らしい企画である。

5月にデトロイトで行われたアメリカ大会に行ってみたが、アメリカ・カナダにとどまらず、ヨーロッパ、オーストラリア、韓国、日本など世界中から140チームが集まっていた。欧米の大学ではこの車両開発が単位として認められていることもあり、日本チームとのレベル差に大きな衝撃を受けて帰国した。もともと産業界で即戦力になる人材を大学で育成するためのPBL (Project Based Learning) として始められただけに、会場には自動車関連企業からリクルートに来ている人が多く見かけられたが、各種パーツ開発などでも産学連携を進めるなど日本の大学よりも実践的教育が進められていることも感じられた。欧米のものづくり産業復活の鍵のひとつはここら辺にもあるのだろう。日本の大学も考えなければならない。

〔文責 草加浩平 (東京大学)〕



### 「ご存じですか？」

毎年7月20日から7月31日までは「海の旬間」として全国各地の海事関連施設で様々なイベントが開かれています。海の旬間は海事関係の広報活動のため昭和48年に設けられたそうですが、それ以前には「海の記念日」というのがありました。「海の記念日」は7月20日で、昭和16年に制定されました。時は明治9年、東北・北海道をご巡幸された明治天皇が「明治丸」に乗って無事函館から横浜に安着された日が7月20日で、「海の記念日」はこの日を記念しています。その後、この日は平成8年に国民の祝日「海の日」となり、平成15年からは7月の第三月曜日になったことは皆様ご存じのことと思います。なお「明治丸」は東京海洋大学（旧東京商船大学）のキャンパス内に保存され観覧もできます。詳しくは東京海洋大学のホームページ<http://www.e.kaiyodai.ac.jp/Meijimaru/>をご参照ください。

筆者の所属する海上技術安全研究所（東京都三鷹市）においても海の旬間における海事広報活動の一環として、平成16年は7月23日に施設の一般公開を予定しています。船舶・海洋関連の研究に使用する大型施設を公開する予定ですが、機械学会の読者の方にはなじみの少ないものと思われるので、ご覧になれば意外な発見があるかもしれません。詳しくは<http://www.nmri.go.jp/>をご参照ください。また各種イベント情報につきましては日本海事広報協会のホームページ <http://www.kaijipr.or.jp/home.shtml> が参考になると思います。この機会に「海」のことに思いを馳せてみられてはいかがでしょうか。

（参考：(財)日本海事広報協会ホームページ）、〔文責 日夏彦彦 (海上技術安全研究所)〕

### ご意見をお寄せ下さい

「日本機械学会誌」はこの度、会員の皆様により一層ご利用いただくためにリニューアルを行いました。主な変更点は、会誌表紙のデザイン、折込付録の添付、論文集目次の掲載の3点です。特に、この折込付録では、会誌に掲載される講演会・講習会などのイベント情報、研究発表や求人募集情報を見やすいカラーのインデックス表示にし、お忙しい会員の方々にはこの付録をみれば本誌の会告すべての項目がわかるよう工夫しております。加えて、担当委員の責任においてニュース性のある記事や論説も掲載して参ります。

本折込付録は、平成16年7月号より12月号までの試行となりますが、この機会に、会誌や付録に対する自由なご意見やご要望を下記メールアドレスにお寄せ下さい（今後アンケート調査を実施予定）。なお、今回のリニューアルに関する経緯は本誌507頁に詳細を記載しております。

会誌のより良い発展のため、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

ご意見の送付先：editing@jsme.or.jp

## 日本機械学会広告総代理店

只今「2004年度年次大会講演論文集・講演資料集・プログラム」広告募集中!

◎広告についてのお問い合わせは下記へ



学術・技術誌専門広告代理業

株式会社 共栄通信社

本社：〒104-0061 東京都中央区銀座7-3-13 (ニューギンザビル)  
TEL. (03) 3572-3381 (代) / FAX. (03) 3572-3590  
IP-TEL. (050) 5550-5098  
E-mail info@kyoeitushin.co.jp

大阪支社：〒530-0047 大阪市北区西天満3-6-8 (笹屋ビル)  
TEL. (06) 6362-6515 (代) / FAX. (06) 6365-6052  
IP-TEL. (050) 5550-5099